

2020. 3. 29 第五主日礼拝

ヨハネ 17:6-19「十字架を前にした祈り」

### 聖書

- 6 あなたが世から選び出して与えてくださった人たちに、わたしはあなたの御名を現しました。彼らはあなたのものでしたが、あなたはわたしに委ねてくださいました。そして彼らはあなたのみことばを守りました。
- 7 あなたがわたしに下さったものはすべて、あなたから出ていることを、今彼らは知っています。
- 8 あなたがわたしに下さったみことばを、わたしが彼らに与えたからです。彼らはそれを受け入れ、わたしがあなたのもとから出て来たことを本当に知り、あなたがわたしを遣わされたことを信じました。
- 9 わたしは彼らのためにお願いします。世のためではなく、あなたがわたしに下さった人たちのためにお願いします。彼らはあなたのものでありますから。
- 10 わたしのもものはすべてあなたのもので、あなたのもものはわたしのものです。わたしは彼らによって栄光を受けました。
- 11 わたしはもう世にいらなくなります。彼らは世にいますが、わたしはあなたのもとに参ります。聖なる父よ、わたしに下さったあなたの御名によって、彼らをお守りください。わたしたちと同じように、彼らが一つになるためです。
- 12 彼らとともにいたとき、わたしはあなたが下さったあなたの御名によって、彼らを守りました。わたしが彼らを保ったので、彼らのうちだれも滅びた者はなく、ただ滅びの子が滅びました。それは、聖書が成就するためでした。
- 13 わたしは今、あなたのもとに参ります。世にあってこれらのことを話しているのは、わたしの喜びが彼らのうちに満ちあふれるためです。
- 14 わたしは彼らにあなたのみことばを与えました。世は彼らを憎みました。わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものではないからです。

15 わたしがお願いすることは、あなたが彼らをこの世から取り去ることではなく、悪い者から守ってくださることです。

16 わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものではありません。

17 真理によって彼らを聖別してください。あなたのみことばは真理です。

18 あなたがわたしを世に遣わされたように、わたしも彼らを世に遣わしました。

19 わたしは彼らのため、わたし自身を聖別します。彼ら自身も真理によって聖別されるためです。

## はじめに

いよいよ来週から受難週に入ります。今日の週報にキリストの最後の一週間を思い巡らすために、エルサレム入京から復活までの足取りを一覧にしたものを挟んでおきました。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書の対照表です。4/12の復活祭（イースター）までの期間を有意義に過ごすために、聖書を通して直接イエスさまの足取りに触れていただきたいのです。イエスさまの心や息づかいに触れ、またイエスさまを取り巻く様々な立場の人の心に触れ、そこに自分を重ねることができますように。多くの方々は聖書のお話を物語として読むことはあっても、そこに自分を登場させ当時の人たちの中に生きることを知りません。しかし、イエスさまによって救いに与ったクリスチャンは、時間と場所を超越して、イエスさまと一緒に最後の時間を過ごすことを知っています。4つの福音書を見比べるのもよし、どれか一つを選びじっくり味わうのもよし、自分の足で十字架の道を辿ることができるように願います。

## 1. 十字架を前にした祈りとは

今日は十字架を前にしたイエスさまの祈りに心を向けます。その祈りとして真っ先に思い浮かぶのはゲツセマネの祈りでしょう。先週は洗足の出来事と最後の晩餐に目を向けました。そのあとのゲツセマネで祈られた激しい祈りは、受難週には必ずと言ってよいほど開かれます。お配りした対照表にも

載っていますので、是非聖書を開いてみてください。

説教準備をしていたときは、ゲツセマネの祈りから説教を示されていました。第 75 次の任命を前にして、主が遣わされた場所でどのように歩むべきかを思い巡らす中で、ゲツセマネの祈りの箇所ではなく、ヨハネの福音書 17 章のイエスさまの「大祭司の祈り」と呼ばれる箇所に思いが向けられました。その中でも特に弟子たちのために祈られた祈りに心を向けるように導かれました。イエスさまは弟子たちのために何を祈られたのでしょうか。6~19 節の中に 3 つの「~のように」ということばがあります。そのことばを中心に思い巡らしてみましよう。

## 2. わたしたちと同じ「ように」一つになるために

イエスさまはご自分が地上を去る時が来たことを知られた時、これまで共に歩いて来た弟子たちに深く思いを向けて祈られました。「わたしはもう世にいません。彼らは世にいますが、わたしはあなたのもとに参ります。聖なる父よ。わたしに下さったあなたの御名によって、彼らをお守りください。わたしたちと同じように、彼らが一つになるためです。」(11 節)。ここに「わたしたちと同じように、彼らが一つになるためです。」ということばがあります。この「わたしたち」とは父なる神さまと御子なるイエスさまのことです。両者は一体であり、愛によって繋がり、切れることのない深い関係を保っています。それは 5 節の「父よ、今、あなたご自身が御前でわたしの栄光を現してください。世界が始まる前に一緒に持っていたあの栄光を。」と祈られた「世界が始まる前から一緒に持っていたあの栄光を」ということばからも分かります。イエスさまは天地創造の前から三位一体の神として存在しておられ、父なる神さまと一つです。その父なる神さまと御子なるイエスさまの強い繋がりの中に、弟子たちも加えられ彼らが一つになることを祈られたのです。12 人の弟子たちの職業や政治的背景は以前にもお話したことがあります。漁師、取税人、熱心党员など様々です。取税人はローマ政府の手下であり、熱心党员は打倒ローマを掲げる極右愛国主義者です。取税人マタイと熱心党员タダイは水と油です。いや、ガソリンと火です。両者が出会

ったら爆発します。そんな彼らをイエスさまは弟子として招き、訓練して来られたのです。最後の晩餐の直前まで、誰が一番弟子かと論じ合っているような弟子たち。ほんとうに大変だったと思います。そんな彼らを残さなければならぬとき、イエスさまは彼らが一つであることをどれだけ願われたことでしょうか。弟子たちが一つになることを願われたイエスさまの祈りは、何と今私たちの下に届けられ、兄弟姉妹が一つであり、教派教団を越えて教会が一つであることを実現しているのです。主によって一つになって生きることは幸いです。

### 3. わたしがこの世のものでない「ように」

次に願われたのは、弟子たちが悪い者から守られるようにという祈りです。世はイエスさまに敵対しました。それゆえにイエスさまは人々の手によって十字架に追いやられようとしているわけです。その矛先は当然弟子たちにも向けられることとなります。なぜなら、イエスさまと弟子とは一体だからです。イエスさまは「わたしは彼らにあなたのみことばを与えました。世は彼らを憎みました。わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものではないからです。わたしが願うことは、あなたが彼らをこの世から取り去ることではなく、悪い者から守ってくださることです。」(14, 15 節)と祈られたのです。

弟子たちはイエスさまに向けられた人々の殺意が自分たちに向けられるかもしれないという恐怖を抱いていました。実際イエスさまが逮捕されたとき、弟子たちは蜘蛛の子を散らすようにみんな逃げてしまいました。イエスさまが尋問される場にいたペテロも、“お前もイエスの仲間ではないのか”と言われたとき、即座に“そんな人は知らない”と言い、それも3度も否定しました。弟子たちは自分たちにまで迫害の手が及ぶことを恐れ、ペテロなどはイエスさまを他人呼ばわりして、自分とは関係ないと言い切ったほどです。

このとき、イエスさまはご自分の存在について奇妙な言い方をされました。「わたしがこの世のものではないように」という表現です。確かにイエスさまは地上の生涯を33年半ほどなさいましたから、その意味では「この世の者」

です。しかし、「わたしはあなたのもとに参ります。」と言われ、父なる神さまの下に帰る時が来たと言いました。イエスさまは元から父なる神さまと共におられたので、その意味では「この世の者ではない」のです。弟子も同じです。生活の場は地上です。しかし、弟子たちはイエスさまと一つですから、やがて地上の生涯を閉じ、天に引き上げられ永遠に神の国の民として生きることが約束されているのです。私たちクリスチャンもこの地上に生きていますが、「この世の者ではありません」。この世は使命を果たすために与えられた場所ではあっても、この世は寄留の地であり究極の住まいではありません。私たちにとっての究極の住まいは永遠の天の御国であり、イエスさまとともに生きる世界です。その住まいには先に召された愛する方々が待っています。私たちもその住まいを目指して、互いに励まし合いながら一緒に歩んで行くではありませんか。私たちはこの世に生きながらも、この世の者ではなく、イエスさまのものなのです。

#### 4. あなたがわたしを世に遣わされた「ように」

最後にイエスさまが祈られた祈りは、究極の住まいに迎えられる前に地上にて果たす使命があることを教え、弟子たちを遣わされた祈りです。「あなたがわたしを世に遣わされたように、わたしも彼らを世に遣わしました。」(18節)と、弟子を世に派遣されました。

イエスさまが父なる神さまから派遣されてこの世界に来られたように、イエスさまは弟子たちを、そして私たちを世に派遣してくださったのです。教団が持つ任命制度はまさにここに立っています。毎年毎年、イエスさまから派遣されてそれぞれの奉仕地に遣わされていくのです。教団という組織が派遣しているのではなく、主が派遣しておられるのです。牧師はイエスさまから一年間という任期のもと派遣されているのです。たとえ何年も同じ地に派遣されたとしても、一年一年がイエスさまから派遣されたという意識を持って仕えています。派遣者は主イエスさまですから、その任地での使命が終わるまで派遣され続け、任地での使命が終われば別の任地に派遣されるわけです。

イエスさまの派遣は牧師に限ったことではありません。クリスチャン全員に対して、「わたしも彼らを世に遣わしました」と言われ、一人一人をこの世に遣わして下さっているのです。それぞれの年齢や立場、置かれた状況に応じてイエスさまのために生きるお互いでありましょう。クリスチャンがこの世に存在する意味は、主イエスさまの恵みを福音という形で届けるためです。イエスさま以上に大切なものはこの世には存在しないことを、自分の生涯をもって証するために私たちはこの世に生かされているのです。新たな任命をもって豊田教会に遣わされた者として、愛する皆さんと一緒にイエスさまを伝えて行きましょう。「People Need the Lord」という賛美歌がありますが、人々が必要としているのはイエスさまです。この方を伝えることに集中して一年を共に歩みたいと献身を新しくしています。同時に愛する兄弟姉妹の献身も更新され、共に一ヶ年を歩んで参りましょう。

## まとめ

十字架を前にした祈りは、イエスさまの遺言の意味があります。地上で共に歩いて来た弟子たちとのお別れは双方にとって重いものがあります。イエスさまは十字架で死なれたあと、三日目に甦り父なる神さまの御許に引き上げられて行きました。残された弟子たちはどうしたのでしょうか。イエスさまが昇天されたあと、聖霊なる神さまの降臨により弟子の時代が始まっています。いのちをかけてイエスさまを伝えた弟子たちにより、地上に教会が誕生し今日に至っています。私たちはその流れの中に救いに与った者です。私たちが一つになって、天の御国を目指して、福音のために生きること、それが主に遣わされた者の生き方です。これを新たな年度、皆さんと共に実現させていきたいと思えます。主の祝福を祈ります。